卒論体験記【比較宗教コース】
浅井勇輝(2022年度卒業)

私は『遺骨と「手元供養」について』という卒業論文を執筆しました。私自身、日本人の持つ宗教観に興味を持っており、いわゆる「無宗教」について学びたいと思い、入学しました。しかし、この「無宗教」については先行研究が多くあり、このテーマで卒論を書くことが厳しいことを大学で学ぶにつれて分かってきました。そのため、過去から現在を考えるのではなく、現在から未来を考える内容に変えようと改めました。また、日本人の宗教観について調べる中で、日本人の骨への考え方が世界の中で特殊であることに気づき、火葬後の骨について興味を持つようになりました。

具体的に卒業論文の内容を決めたのは、3年生の冬あたりでした。ちょうどその頃に遺骨を家墓に納めるのではなく、家に置いておく「手元供養」という方法を知り、日本人の遺骨への捉え方を研究できるのではないかと思い、テーマを決めました。しかし、具体的に動き出したのは4年生になってからの６月頃です。木村先生に相談に行った際に手元供養に関する商品を提供している企業にインタビューを行わないと書けないと言われたことがきっかけでした。そこから、インタビューをしたい企業をピックアップし、急いで電話をかけ、アポイントをとりました。幸運なことに快くインタビューを受けてくださり、大変ありがたかったです。インタビューをしっかり行ったことで10月以降の執筆で困ることはなく、難なく卒業論文を書き上げることができました。

今回の卒業論文では、企業へのインタビューを主として行いました。電話でのアポイント取りや全く知らない人の元へ行き、お話を聞く大変さはとてもありましたが、社会に出た後に必要なスキルだと思い、必死に取り組みました。卒業論文の執筆を通して、相手から話を聞き出す力や文章を書く力、まとめる力、最終的には度胸など様々なことが身に付いたように感じます。また、受け身ではなく、自分で疑問を見つけ、それを深くまで調べることの楽しさを知ることができた良い経験になりました。